

男著, 勉誠出版, 2017年刊)に譲る。同書には、
入手しにくい関係史料の解説・公開も試みてあ

る。参看いただけると有難い。

(平成29年12月六史学会合同例会)

シソの古典的記述から

伊藤美千穂

シソは蘇葉として古来より日本でも慣れ親しんできた生薬である。葉が緑色のいわゆる大葉タイプと表裏両面が赤紫色の赤紫蘇, 向軸側が緑色で背軸側が赤紫色の片面シソがあるが, 薬用にするのは赤紫蘇か片面シソである。医薬品として蘇葉を取り扱う際には, 形態的特徴に加えて精油にペリラルデヒドというシソ特有の成分を十分量含んでいることが必要で, これらの特徴を確認することで生薬としての品質と安全性を確保している(日本薬局方参照)。

生薬としての蘇葉は半夏厚朴湯, 参蘇飲, 香蘇散, 神秘湯, 柴朴湯等の漢方処方に配合される。これら漢方処方の出典はそれぞれ金匱要略, 和剂局方, 下台秘要などであり, 最も古い出典は金匱要略であるものの, 生薬各論としての蘇葉は神農本草経には記述が無く, これより少し後の時代に書かれたとされる名医別録の中にあるものが最も古い記述のようである。

神農本草経以降の本草書を網羅的に集約して明の時代に編纂された本草綱目は, 生薬についての古典的記述を調べる時に最も参考しやすいものの一つである。この本草綱目の記述によれば, シソは「蘇」として書かれており, 別名は紫蘇や赤蘇で, 舒暢(ジョウショウ:心をのびのびさせる)作用や行気活血(気を廻らせ, 血を和ませる)作用が期待できる生薬とされ, 紫蘇と白蘇は別なものであり, 蘇は荏(エゴマ)の仲間であるが味は荏より辛く, 桂(桂皮)のようである, などとされている。さらに, 葉の下面が紫色でなく, 香りがよくなく, エゴマに似たものは野蘇といい, 薬用にはできない, 薬用には葉の両面が紫色のもの

が良い, 等とも書かれている。

これらの古典的記述は, これまで筆者がシソについて行ってきた様々な実験結果とよく符合する。すなわち, シソ属植物には食用, 薬用にする栽培種と, これと染色体数の異なる3種類の野生種があるが, 蘇葉の香りであるペリラルデヒドを含むものは栽培種のシソのみに見出され, いずれの野生種にも存在しない。また, 葉の両面が赤紫色のものは栽培種のシソにしか存在しない。さらにマウスを用いた生薬薬理学的研究からは, ペリラルデヒドを含む蘇葉の精油画分は, ごく薄い濃度で吸入投与(呼吸の吸気とともににおいとして体内に入る)すると, マウスの運動量が減っておとなくなり, また抗不安効果や抗うつ効果もあることから, いわゆるリラックスと表現される効果, 古典的記述で言えば舒暢作用があるのではないかと考察されたのである。

生薬は長年の経験, 試行錯誤の上に選ばれ, 使われ続けてきた医薬品である。科学未発達時代の試行錯誤の成果を, 現代科学の実験データやエビデンスで裏付けることができれば, 伝統薬, 伝統医学の利用推進にうまく繋がっていくのではないかと, そういう期待感も持っていただける例になれば, という思いもあり, 話題提供させていただいた。シソについての様々な研究は筆者が大学院生の時から取り組んでいるもので, もうかれこれ25年以上続けていることになるが, まだまだ継続中であり, 今後もさらに掘り下げ, また広げてゆきたいと考えている。

(平成29年12月六史学会合同例会)